

〈二年生、初秋〉

「告られたあ!?!」

ファーストフード店の一角で、素つ頓狂な声が上がった。ユニゾンして聞こえたその叫びは、しかしさほど注目を集めることもなく喧騒に紛れて消える。

発言主たる友人二人の注目を浴びた勘右衛門は、居心地の悪さを誤魔化すべく手元にあった飲み物のストローに口をつけた。しかしそれは吸つても下品な音を奏するだけで、喉を潤してくれることも気を紛らわせてくれることもなかった。期待した効果を得られなかったのに加え不愉快な音を立ててしまったことに、勘右衛門は思わず顔を顰める。

「えっ、誰に?」

正面の席から、先刻叫んだ片割れの女子高生が上体を乗り出し尋ねてきた。ふわふわとした癖毛が重力に従い彼女の胸前へと落ちかかる。

彼女は不破実蕾みらいといい、近隣にある女子高校に通う二年生同期だ。同じ組織に属したことはただの一度もないが、友人の友人から頻繁に顔を合わせる仲にまでなった貴重な女友達である。

(言うんじゃないかった……)

想定以上の食いつきを見せる友人にやや気圧されつつ、勘右衛門は内心で嘆息した。

この居心地の悪い状況は、先日勘右衛門が彼女との約束をドタキャンしたことが発端で発生している。本日も育ち盛りには欠かせない放課後のおやつタイムをいつもどおり楽しんでいた

ところ、実蕾が思い出したように話題に出してきたのだ。人気のスイーツ店へ一緒に行く予定だったためか、彼女の口調はやや批判的だった。故に勘右衛門は深く考えずに真正直に話してしまったのだ——唐突に一方的な呼び出しを受けたため不可抗力だったのだと。呼び出されたと聞いたなら、それが誰にどんな用向きでされたものだったのか尋ねるのは自然の流れだろう。そうして続いた問いにも素直に応じてしまった結果がこのさまである。

勘右衛門はあからさまに困っている表情を作り救いを求めたが、彼女はただこちらをじっと見つめているだけだ。質問を取り下げてくれるつもりはなさそうで、むしろ白状するまで解放されなさそうな雰囲気さえある。この様子では何も言わずに話を変えることはできなさそうだ。気乗りはしないが決して話せないことではない。故に勘右衛門は早々に黙秘を諦め、数日前の記憶を手繰り寄せて相手の顔を思い浮かべた。

「喋ったこと、あったかなあ……ってぐらいの同級生だよ。クラスも離れてる」

素直に応じた勘右衛門に、しかし彼女は満足するどころかますます身を乗り出して来る。

「ってことは男子だよな？ 返事はしたの？」

「……まだ。早くしなきゃな、って思っただけ——」

「けど？」

言い淀む己の言葉尻を取って先を促してくる実蕾に、さすがの勘右衛門も閉口した。温和で理的、しかしどこか男らしささえ感じさせるこざっぱりとした性質である彼女が、

こんなにも食いついてくるとは思わなかった。他の女子とは桁違いに付き合ひ易いためあまり意識していなかったが、友人の恋愛話に興味津々な辺り実蕃もやはり女子だったということか。そんな割とどうでもいい、しかもかなり失礼な所感を心の内だけでだけ述べる。一方で詰められた分距離を取るつもりで身を引きながら口を開いた。

「……気が進まなくてさ。何であれ、断るのって心苦しいもんだろ？」  
「断るの？」

言葉を選びながら続けると、今度は別の方向から冷静な質問が割り込んできた。

落ち着いた声音で問いを紡いだのは実蕃の隣にいる男子高校生——久々知兵助だった。言わずもがな、先ほどのユニゾンを奏でた今一人である。彼は同じ学校に通う旧くからの友人だ。特別公言するものでもないと思っているが、親友と呼んで差し支えない気心知れた仲である。

兵助は黙ったままこちらをじっと見つめている。何の感情も読み取れない伶俐な顔は、目力の強さのためか相対し慣れていてなお、やや気圧される。

「断るよ。知らない人だし……」

少々たじろいだ勘右衛門は、言いわけ染みた口調になりつつモゴモゴ答えた。それでも兵助は表情を変えもしなければ視線を逸らすこともしない。その真摯な瞳は『答えが決まっているなら何故すぐに返事をしないのか』とでも言いたげだ。

「だって、俺同性に告白したんだぞ？……すごく、勇気が必要だっただろなって思うんだよ」

親友の射抜くような視線に困りながらも、勘右衛門は思うところを率直に説明した。

男子高校はその名の通り、同年代の男子だけで構成される特殊な環境だ。それ故か、男同士の恋愛関係が他環境に比して割合多く生まれる傾向にあると言われている。とはいえ男子校の生徒なら誰でも同性愛を理解し受け入れられるわけでは当然ない。特に勘右衛門たちの所属する大川学園は町中に建つ平凡な高校で、近隣には女子校や共学校も存在する。閉鎖的な環境ではないためならではの雰囲気染まる者は少数派に留まる傾向がある。即ち『男子校だから同性に好意を伝えても手酷い拒絶を受ける可能性は低い』とは言えないのだ。

そんなことは学園の生徒なら十分に理解しているだろう。にも拘わらず、その同輩は大して交流もなかったはずの勘右衛門に好意を伝えて来たのだ。真剣な瞳は真っ直ぐに己を見据え、しかし握りしめられた両の手は震えていた。彼が相当の覚悟をもって己に告白する選択をしたことは疑いようもない。

勘右衛門には、そんな同輩をその場で即拒絶することができなかったのだ。

「同性だから断るわけじゃないんだ。でも口でそう言ったらなんか……薄っぺらくなるだろう」だから気が進まないのだと結論づけて、勘右衛門は口を閉ざした。

勇気を振り絞り告白してきた彼に、同性故に断られたのだという引け目を植え付けてしまいたくない——その気持ちに嘘はない。彼には次の恋でも、その相手がやはり男同性だったとしても、自身の気持ちを偽ることなく相手へぶつけて欲しいと思っている。

だがそれ以上に、自分が嫌な思いをすることが嫌だった。自分の返答で誰かを傷つけるのはどんな理由であれ喜ばしいことではない。故に不誠実な自覚がありながらも返答を保留にしていたのだ。しかしいくら言葉を選ぼうと彼を拒絶する結論が変わることはないのだ、最終的に相手を傷つけ申し訳ない気持ちになる結末はどうあっても避けられない。

「……なんて言っても仕方ないよな、明日辺りにでもちゃんと断ってくる。心配ご無用！」  
利己的な己を苦く笑いつつ、勘右衛門は一方的に決着をつける旨を宣誓することで無理やり話を終わらせた。こんな面白くもない話を続ける意義はなく、話題を変えようと思案する。

「誰かに彼氏のふりをして貰うっていうのはどう？」

しかし勘右衛門が次の話題を思いつくより先に、それまで黙っていた実蕾が突然、断るための具体的な方法を提案してきた。思いもよらない話の展開に目を丸くした勘右衛門だったが、特別拒絶する理由もない。故にその内容を吟味した上で軽く眉を下げた。

「うーん、嘘つくのはどうなのかな……」

「でも『彼氏いるからごめん』なら、同性だから断られたんじゃないのははっきりするぞ」

難色を示した勘右衛門に、兵助が提案者の言を継ぐように補足してきた。どうやら彼もその案に乗る意向であるらしい。確かに、同性であることが問題ではないのだという事実を遠回しに伝えられると言う点においては、一理あるように思える。だが。

「……確かにそうかもしれないけどさあ、嘘だってバレたら逆に傷つけることになるだろ」

「バレないようにすればいいだろ、勘右衛門そういうの得意じゃないか」

「人を詐欺師みたいに言うのやめてくれる？」

勘右衛門は自身に失礼な評を付けてきた親友を半眼で睨め付けた。中途半端な抗議の言葉は彼の発言への不満と不貞腐れた気分によって構成されている。不貞腐れていたのは、彼の指摘があながち間違いはなかったからだ。勘右衛門は嘘が見し同輩が傷つくことを本気で懸念していたわけではなかった。ただ、真っ直ぐにぶつかって来た相手に不誠実であるように思え気が咎めていただけである。それを見透かされたかのように決まりが悪かったのだ。

「大体誰に頼むんだよ。兵助は無理だし、ハチにふりとか器用な真似ができるとは思えんし」  
思いの外熱心に実蓄の案を推してくる兵助に、勘右衛門はその案を採用するとしたら問題となるだろう点をやや投げやり気味に指摘した。

実行に移すには当然彼氏役をキャストイングする必要があるが、それは誰でもいいわけではない。口裏合わせができて秘密を漏洩しない、信頼のおける人物である必要がある。

しかし兵助は発案者である実蓄と付き合っており、その事実は学園内に広く知れ渡っていた。繁く足を運ぶ彼女の存在が羨望の視線を集めていた故である。また、勘右衛門がハチと呼んだここには居ない同輩・竹谷八左衛門は、良くも悪くも裏表がなくこういった企てには向かない性格をしている。適した役者がいなければ実行に移しようがない。検討するだけ無駄だ。

「三郎は？」

「三郎？ いやあいつ面倒くさがるだろ。無理無理」

続いて兵助が挙げた『いつものメンバー』の内の最後の一人の名を、勘右衛門は即座に斬り捨てた。胸の内に生じてきた苦い思いから目を逸らして平静を装う。

鉢屋三郎は、勘右衛門の隣のクラスの生徒であり実蓄のいとこだ。そして彼は、実蓄のことが好きだった。三郎から直接そうと聞いたわけではないが、勘右衛門は知っていた。——彼のことを、無意識の内に見つめてしまっていたが故に。

勘右衛門が三郎に出会ったのは今から一年半ほど前、大川学園に入学し暫く経った頃だった。幸運にも同じクラスだった兵助と高校でも常につるんでいた。そんな彼がある昼休みに突然見知らぬ生徒を連れてきた。それが八左エ門だった。何でも、受験前に通っていた塾で親しくしていたのだとか。勘右衛門は完全に初対面だったのだが、彼の明るく気さくな人柄故にすぐに親しくなり、一月もしない内に兵助抜きでも喋ったり遊んだりする間柄になっていた。

それから程なくして、今度は八左エ門が馴染みの無い生徒を連れてきた。彼が日頃つるんでいるクラスメイトだというその生徒が三郎だった。

当初三郎は大変素っ気ない態度だったが、八左エ門とつるむようになつた結果共にいることが増えたため自然と関わりが増え親しくなつていった。打ち解けてなおドライな印象はあるが薄情なわけでは決してない。頭の回転が速く悪戯好きな愉快な奴——そんな三郎とは不思議と馬が合い、気がつけば勘右衛門は彼と共にいることに妙な心地良さを覚えるようになっていた。

そんなこんなで彼らとつるみ出して二月ほど経った頃だったか。夏休みを目前に控えたある暑い日、突然三郎に放課後時間を作って欲しいと頼まれた。思いがけない頼みに三人は顔を見合わせた。なんせ彼は、放課後と休日だけは付き合いがすこぶる悪かったのだ。珍しいこともあるものだと思つたが特に予定もない。故に快く応じた三人は、連れられて行つたファミレスで、三郎と雰囲気の似た同い年の女子高校生——実蕾を紹介されたのだった。併せて、彼女と過ごすことを優先していたために付き合いが悪かつたこと、それを知つた実蕾に叱られたためこの度引き合わせるこゝとなつた旨の説明を受けた。

紹介を受けてすぐに勘右衛門は、三郎が彼女を特別に好んでいるのだということに気付いた。口調は普段とそう変わらないが、態度がどことなく柔らかい。その上割と私の強い方であるあの三郎が、彼女の言動は基本尊重する姿勢を見せるのだ。何より、彼が実蕾に向ける視線がひどく優しく、彼女のことを好きだと、大切に思つているとありありと語つていた。

そんな三郎に思いがけず大きな衝撃を受けた。そこで初めて勘右衛門は彼のことをさういふ意味で想うようになっていた己に気がついたのだ。まさか自分が同性を好きになるとは。おまけに失恋してようやく気が付くなど、残念過ぎるほどの鈍感ぶりである。

——そう。勘右衛門が同輩からの告白を拒絶する真の理由は、三郎に恋愛感情を抱いているからだ。想う相手がいる以上、他からの好意を受け入れる選択肢が存在しないのは当然である。三郎への好意が断る理由、それは事実だ。だが実蕾が兵助と付き合い始めた故に三郎もまた

失恋している、ということとは理由になつてはいなかつた。なんせ勘右衛門は自身の想いを三郎に伝えることは元より他の誰にも、兵助にさえ話すつもりがないのだから。

実蓄を好きだった三郎の恋愛対象は、当然異性だ。彼が同性愛に偏見を持つていないことは知っているが、それは自身が対象とされた時にどう感じるかとは次元の違う話だ。偏見がないのは他人事だから、という可能性も十二分にある。同性という枷は、やはり重く大きい。

また性別の問題を抜きにしても、彼が自分を好きになることはないだろう。そのくらい実蓄と自分が性質も思考も異なる人間だということ、勘右衛門は冷静に分析し理解していた。勘右衛門とて、気がついたら三郎を好きになつていただけで真に同性愛者なわけではない。初恋は同じ小学校の女子だったし、三郎以外の同性と密着したとて何も思わない。だが自身にさえ何故彼に恋愛感情を抱くようになったのか分からないのだ。三郎の目に魅力的に映りそうな要素を何ひとつ持つていない己が、性別の壁さえ越えて彼を射止められるはずもない。

感情は目に見えない。抱いた本人が認めアウトプットして初めて事実としての輪郭を得る。逆に言えば、表現されない限り存在しないのと同じだ。故に人は皆、自身の胸を震わせる感情の存在を知つて欲しくて愛を告白するのである。

だが勘右衛門の場合、知つて貰うことに利点はない。受け止めて貰えたとして関係が変質してしまうのは確実で、それは勘右衛門の望むところではない。ならば輪郭など持たぬ方がいいに決まっている。故に想像したことはあつても実際に告白するなど、検討したことすらなかつた。

想像の中で勘右衛門は必ず三郎に拒絶された。時に自身で想像した癖に『三郎はそんな非道な人じゃない!』と憤りを覚えるほどの手酷いやり方で。もしもの時に受ける傷を浅くするため想定でき得る最悪のシナリオを作っているのだろうか、我ながらなんとも勝手な話である。

そして勘右衛門にはその『想像の中で苦しんでいる自分』が、これから己に拒絶される同輩に重なって見えていた。告白する勇氣も覚悟も持てずにいる癖に己を投影せずにはいられない、そんな同輩を他の誰でもない自分自身が傷つけることになる。それが嫌だった。まともそうな理由を取り繕っていただけで、実際は自分可愛さによる理由でしかなかったのだ。

——とにかく、三郎に彼氏役を頼むなどあり得ないことだ。勘右衛門とて切り替えられずにいるのだ。長年抱えてきたのだろう実蕾への想いを、彼が整理できているとは到底思えない。そもそも感情は自由なものだ。恋情を抱くこと自体はたとえ相手に恋人がいても罪にはならない。失恋してなおそっと想い続ける選択をしたとて咎められる謂れはないのだ。嘘でも実蕾以外の恋人役を務めること、それを彼女に知られることは彼にとって耐えがたいことだろう。

「三郎、おっけーだって」

その時、信じがたい一報が飛び込んできた。驚いて発言主に目をやれば、いつの間にか会話から抜けていた実蕾が携帯を耳から離れたところだった。彼女はそれをパチンと閉じて制服のポケットにしまっただけからいつもと変わらぬ柔和な笑みを向けてくる。どうやら勘右衛門が自身

の抱える感情に気を取られている隙に、三郎への打診は完遂されてしまったようだった。迅速すぎる彼女の行動、何より己の想定にない耳を疑うその結果に勘右衛門はただ瞠目した。

だが冷静になってくると、三郎が要請に応じたことにはすぐ合点がいった。彼が実蓄の頼みを正当な理由もなく断れるはずがないのだ。勘右衛門は哀れな三郎に思いを馳せ内心で涙した。

「——と、いうことで役者は揃ったんだ。明日の放課後、ちゃんと話を付けて来るんだよ」  
「う、うん……ちゃんとする、よ……」

にっこり笑顔で念押しして来る実蓄に、勘右衛門は曖昧な笑みを浮かべ頷いた。

不可抗力とはいえ、己の自己保身が原因で三郎に精神的苦痛を与える展開になってしまった。恐らくは彼の抱える恋情を知る唯一の人間だというのに、不甲斐ないことだ。しかし彼女らの言動は百パーセント厚意に基づいており、既にどうにもならない状況なのだからやむを得まい。自身が直面している状況を反芻し一層憂鬱になった勘右衛門は、そんな己を誤魔化すように冷めて硬くなったポテトをつまむと無理やり口に押し込んだ。

\*\*\*

その日すべての授業およびホームルームが終わった教室で、勘右衛門は教科書類をだらだらと片付けていた。室内は人もまばらでクラスメイトである兵助の姿も既がない。にも拘わらずまだ帰り支度が終わっていないのは、勘右衛門の動作のすべてが極めて鈍く遅いせいだった。勘右衛門には、この後大変気乗りのしない用事が控えている。昨日突如決まったその予定は大変憂鬱な気分をもたらしていた。それでも本日の授業をなんとか終えはしたのだが、刻限が直前に迫った現在、気の重さが如実に動作に表れていたというわけである。

「で、俺はどうすれば？」

不意に掛けられた声に顔を上げると、いつの間に来たのだろうか傍らに三郎が立っていた。通学鞆を肩に提げ帰り支度は万端のようである。本日は移動教室の兼ね合いで共に昼食を取ることができなかつたため、彼とまともに顔を合わせたのは昨日の昼休み以来だ。

「……心停止、しなかつたか？」

「なんて？」

開口一番に昨日から気がかりだったことを脈絡なく問えば、三郎は不審げに訊き返してきた。意味が伝わらないような尋ね方をわざとしたのだ、そんな反応になるのは当然である。

昨日三郎は、好意を寄せる相手から他の人の恋人役を務めるよう依頼されてしまったのだ。勘右衛門は彼がショックのあまりに電話の向こうで心停止していたのではないか、と気を揉んでいたのである。だが注意深く様子を窺うも、彼は普段と何ら変わらないように見えた。

「んや、なんでも。悪いな、変なこと頼んで」

他人の感情を正確に推し測るなどできようはずもなく、特に答えが欲しいわけでもなかった勘右衛門は自らが投げかけたその問いを雑に濁した。

「この後校舎裏で話すことになってるから、その時一緒に居てくれれば」

席を立ちつつ大まかに説明すると、三郎はふーん、と関心薄げな音を漏らした。勘右衛門はそれを気に留めることもなく、椅子を机の下に押し込んでから荷の詰まった鞆を持ち上げる。

「じゃあ、行くか」

鞆を肩に掛け教室を出る準備が整ったタイミングで、傍らから軽い調子で呼びかけられた。ほら、という呼び声に首を返せば、自分の方に手のひらが差し出されている。

「ん？」

「付き合ってるんだろ、今は」

脈絡のない彼の行動に瞬き首を捻れば、三郎はごく当然そうに補足を口にした。お陰でその意図を理解することはできたが、予想もしていなかった状況に勘右衛門は目を丸くする。

「……おい、早くしろよ」

「あ、うん」

手のひらを眺めたままぼんやりしていると、やや焦れたように急かされた。未だ状況を呑み込み切れてはいなかったが、応じない理由は別にない。故に勘右衛門は差し出された手に己の

それを乗せた。乗せるが早いか、三郎は勘右衛門の手を掴み歩き出した。引かれるままに彼の後ろを歩きながら、勘右衛門は徐々に息を吹き返し始めた鈍い頭で思案する。

確かに、三郎の言に誤りはない。ないのだが、彼氏役はこれから返事をする同輩の前で必要だけで今この場から務める必要はない。まばらながらまだ残っている生徒もそこそこいて、中には既に好奇に満ちた目を向けてきている者もいる。この状態のまま移動すればするほど、より多くの生徒に目撃されてしまうだろう。噂になるのは確実だ。しかし三郎は気づいているのかい、視線を気にした様子もなく黙々と足を進めていく。

不要な噂が立つから放せ——そう伝えてこの手を振りほどくべきだ。そう理解していながら勘右衛門は、繋いだ手から伝わってくる温もりで鬱々としていた心が軽くなるように感じられるが故に、彼のための言葉を口にすることもその手を放すこともできなかった。

そのまま移動すること数分、遂に二人は校舎裏へ到着した。差し迫ってきた実感に、浮き足立っていた心が再び重くなっていく。勘右衛門は気の重さを振り切るように歩みを速め三郎の前に出た。そのまま指定の場所——校舎からの視線が庭木で遮られるため告白スポットとなっている位置——へ誘導する。先日勘右衛門が呼び出されたのもここだった。

「話は俺がつけるし、三郎は黙ってそこにいてくれればいいから」

三郎を隣に立たせて手を放した勘右衛門は、改めて具体的な指示を出した。それが済むと、正面に向き直って口を閉ざし、この後どのような展開にすべきかを思案し始めた。

実はまだ、同輩をふるに当たつての展開を検討していなかったのだ。勘右衛門は夏休み後半に入つてようやく宿題に手を付ける性質である。つまりどういふことかと言えば、気の重さを理由に目を逸らし続け直前に迫つた今になってようやく具体的な検討に入った、ということだ。言うべきことは大方決まつているとはいへ、さすがに備えのないまま相對できるほど肝が据わつてはいない。故に勘右衛門は真剣だった。自業自得ではあるが検討に使えるのは同輩が到着するまでの僅かな時間しかない。切羽詰まつた状況故に無言になるのも当然だった。

「なんでだよ。協力してやるんだから俺に言わせろよ」

しかしひとつ返事で応じるものと思つていた三郎は、何故か鼻を鳴らして不服を申し立ててきた。想定外かつ意味不明な友人の主張に思考を妨げられ、勘右衛門は眉を寄せる。

「——はあ？……なんて言うつもりだよ」

「こいつ、俺のだから。って」

怪訝に思いつつも一応尋ねてみたが、詳細を聞いてなお彼の主張は理解できなかつた。格好つけたがりな三郎がそんなキザなセリフを、しかも進んで言いたがるなど気でも狂れたか。

「いやいや、少女漫画かよ」

「一度でいいから言つてみたいセリフつてやつだろ」

「え、俺全然言いたくないけど……？」

半笑いでつつこんでもなお主張を撤回しようとしなない三郎に、さすがの勘右衛門も困惑した。

出会って一年半程度では長い付き合いとは言えないだろう。それでも彼の人となりはある程度理解できているつもりなのだが。

「てか三郎のキャラじゃなくない？ 恥ずかしくないのかよ」

「だからこそだろ」

困惑半分からかい半分で投げかけた言葉に、しかし三郎は薄く笑って請け合うだけだった。そこでようやく勘右衛門は、それが気が滅入りつつあった自分を和ませようという、彼なりの心配りだったらしいことに気が付いた。思いがけない配慮を受け、強張っていた心がふんわりと解けるようだ。反面、なんともくすぐったい感覚に据わりの悪さを覚える。

「……別にいいけどさあ。相手が俺でもいいのかよ、それ」

嬉しいような恥ずかしいような置きどころのない気分を、勘右衛門は空を仰いで憎まれ口を叩くことで誤魔化した。だが言葉の端々に喜色が滲み出てしまっているのが自分でも分かり、むしろ一層居た堪れない気分になる。

勘右衛門が気恥ずかしさを持って余して地面を爪先でつついていた、ちょうどその時。誰かが近づいてくる気配を知覚した。顔を上げれば件の同輩がこちらにやってくるのが視界に入る。彼は告白の時と同様、いやそれ以上に青白い顔をしていた。

ぎこちない動作で近づいてきた彼は、やがて正面で立ち止まった。勘右衛門は緊張に揺れる彼の目を見つめたまま三郎の動きを待った。気遣い故とはいえ、直前の話では三郎が話をつけ

る方針になっていたのだ。下手な動きをして嘘が露見しては本末転倒である。

しかし、傍らの彼氏殿は一向に行動を開始する気配を見せない。不審に思つてちらと様子を窺えば、三郎は正面を呆然と見つめたままフリーズしているようだ。

(……やっぱ無理だよな)。三郎、なんだかんだいいやつだもんなあ)

勘右衛門は三郎の心中を察して内心で独りごちた。顔色の悪い同輩を前に罪悪感でも覚えているのだろう。

少しばかり残念には思ったが、そもそも好意を寄せられたのは自分だ。自身でけりを付けるべきことである。事前に備えができなかったことを除けば当初の予定通りで問題もない。故に勘右衛門は、胸に凝った息を吐き出し腹を括り直した。

「——もしかして……彼氏、だったりする？ 隣……、」

だが勘右衛門が話し始めるより先に、同輩が躊躇いがちに問うてきた。口にしかけた言葉で失い一瞬停止したものの、勘右衛門はなんとか首を縦に動かしてそれに応じた。状況から既に返答を察しているのだろう彼に口火を切らせてしまった。それに罪悪感を覚えつつ、勘右衛門はせめてはつきりと頷いて見せる。

「そっか……尾浜、鉢屋と付き合ってたのか……」

落胆した様子で呟いた同輩の言葉に勘右衛門は瞠目した。三郎のことも知っているとは思わなかった。彼は一体いつどこで自分を知ったのだろう。申し訳ないことに勘右衛門にはとんと

心当たりがなかった。もしや三郎の知り合いなのではと考えちらと窺うも、神妙な表情で同輩をじつと見つめている三郎の顔からは親しみに類する感情は読み取れない。心臓に毛の生えていない勘右衛門にはこの段階で本人に尋ねるなどという蛮行に及べるはずもなく、真実を知る術はなかった。悲しげに肩を落としているその見知らぬ同輩に、ただただ良心が痛む。

「ごめんな、……ありがとう」

「いや俺の方こそ、ごめん」

心の底からの謝罪と好意への感謝を告げた勘右衛門に、同輩は泣き笑いのような顔で応じた。そのまま軽く会釈のような動作だけすると、踵を返して去っていく。勘右衛門はその背が見えなくなるまで、その場に立ち尽くして彼を見送った。

やはり自分のせいで誰かが悲しむというのはやるせない。しかしこれで憂鬱な用事には片がついた。勘右衛門は感傷を振り切るように軽く首を振ってから、未だ傍らで微動だにせず沈黙している彼氏殿に向き直った。

三郎はその場で俯いたまま立ち尽くしている。眉を下げたその顔はしかし沈痛というよりはややぼんやりとしているように見えた。軽い気持ちからマウントを取ろうとした自身の短慮に沈んででもいるのかと思ったのだが、表情からその心中を推し量るのは難しそうだ。

「んじゃ、話は済んだし帰ろっか」

意識的に気軽さを装って声をかけたが、三郎は少しの反応をも返さない。勘右衛門は小さくため息をつくと棒立ちになって、彼の手を掴んだ。そのまま引きずるようにして歩き出す。

「まったく……。自分から言い出しといて、いざとなったらフリーズってなんなんだよ」

「……ごめん」

足を動かす傍ら苦笑しながら批判すると、やや間を置いて三郎がようやく口を利いた。言葉少なに謝罪するその声はなんとも小さく頼りない。思った以上に落ち込んでいるようだ。

「冗談だよ。元々自分で断るつもりだったし。……気にすんな」

彼氏ヅラを気取る三郎を拝めなかったのは確かに残念だが、彼を責める気など元よりない。故に勘右衛門は薄く笑って彼を軽く慰めた。

「三郎が付き合ってくれたお陰で変に傷つけずに済んだと思うし。ありがとな」

続けざま礼を述べたが三郎は押し黙ったまま返事をしない。——今回の件が、彼の負い目にならなければいいのだが。勘右衛門は個人的な問題に彼を巻き込んでしまったことに罪悪感を覚えた。

沈黙の中を、三郎の手を引いて歩く。繋いだ手は、往き道と同様に温かい。

「——なあ。もし続けて欲しいって言ったら、続けてくれるか？……彼氏役」

気付いた時には、わけの分からない頼みごとが口から勝手に零れ落ちていた。すべてを言葉にし終えてようやく我に返った勘右衛門は、まったく予定になかった自身の発言に青ざめる。

「ほ、ほら、すぐやめたら嘘ってバレちゃうかもしれないだろ？　なんかお前のことも知ってみたいだしさ。別に知り合いじゃあないんだろ？　お前も」

思いつくままに、提案した理由と懸念を慌てて言い添えた。咄嗟の言いわけでしかなかったのだが、述べて後何度か反芻しても違和感はなく、我ながら適切な根拠付けのように思える。兵助の言うとおり、己には詐欺師の才があるのかも知れない。

そんな阿呆なことを考え一旦安堵した勘右衛門だったが、三郎はそれでもなお沈黙している。立て直しは試みたが、余計なことを言った事実を変えることはできない。妙な提案をした己を三郎はどう思っているのだろうか。言葉の一つさえ返してくれない彼を振り返る勇気もなく、後悔がひたひたと押し寄せてくる。

「……俺は、構わないけど」

最悪の想像に脳裏を埋め尽くされていた勘右衛門の耳に、小さな眩ぎが届いた。投じられた肯定的な一石に虚を突かれ、すべての動作が一瞬停止する。

「———そ、うか。……助かる、よ……」

追って訪れた深い安堵に、緊張していた身体から力が抜ける。結果勘右衛門は、彼の返答になんとか言葉を返すと同時に繋いだ手をついきゅっと握ってしまった。

油断し重ねた失態に再び青ざめる。それは喜びのあまり手を握ったとしか思えない反応で、三郎からすれば奇妙でしかない。焦った勘右衛門は咄嗟に彼の手を放そうとした。

しかし勘右衛門が力を抜くよりも早く、その手は同程度の強さで握り返されていた。それは恐らく、握られたことへの反射に近い反応だったのだろう。だがその柔らかくも力強い感触、三郎が無言を貫いているこの状況が、まるで彼が己の心の動きに応えてくれたかのような錯覚を生じさせていた。知らず、歓びが胸いっぱい溢れてくる。

そのなんとも言いがたい幸福感に抗う術を、勘右衛門は持っていなかった。それ故に二人は往き道よりも少しだけしつかりと手を繋いだまま、ただ黙々と足を動かし続けた。

「勘右衛門！」

唐突に、前方から己の名を呼ぶ声が聞こえた。顔を上げれば、正門付近に八左エ門と兵助がいるのが見える。

その奥に実蓄の姿を認めた瞬間、勘右衛門は今度こそ、半ば振り払うようにして三郎の手を放した。急いだ結果少しばかり乱暴になってしまったことを後悔しながらも、腕全体を使ってこちらに手を振っている八左エ門に倣いやや大げさな動作で手を振り返す。

「ほら行くぞ、みんな待ってる」

次いで、先刻の行動を誤魔化すように肩越しに首を返し、背後の三郎に声を掛けた。しかし彼の反応を確認もせず正面に向き直り、そのまま逃げるように兵助たちの方へと駆け出した。



## 〈二年生、冬〉

「勘右衛門悪い、ジャージ貸して」

廊下から呼びかけてくる聞き慣れた声に、勘右衛門は勝手にむにゃつく口元に力を込めた。無理やりへの字に曲げて不満げな表情を作る。それは近頃時折発生するようになった嬉しくも困った状況だった。

あれから早くも半年ほどが過ぎ、季節は冬に変わっていた。勘右衛門が同輩から寄せられた好意を差し障りなく断るために採用された『彼氏のふり』は、やめようという意見が双方から出ていないというだけの理由でそこはかとなく継続されていた。

とはいえ互いの態度や関係に特別変わった点はない。時折三郎がネタとして持ち出してくるくらいである。かの同輩を傷つけないという（建前とはいえ）誠実な目的はほぼ風化しており、真剣味の削げたその扱いは最早『恋人ごっこ』という表現の方が適切なように思える。

特別変わった点はないと言ったばかりが、厳密にはその評価は正しくない。大したことではないが二点ほど、認識している変化はあった。

まず、三郎と時折手を繋ぐようになったことが挙げられる。昼休みの前後や移動教室で共に校内を移動する際に、まるで仲良しこよしの幼稚園児がごとく手を繋いで歩くのである。これは三郎の提案による偽装演出で『嘘に真実味を与えるための彼氏アピール活動』であるらしい。

かの同輩は三郎のことも知っているようだったが、三郎もやはり面識はないそうだ。ならば恋人同士を匂わせる言動を日常的に取り入れておいた方がいいだろう、というのである。

交際を断りに行く際に手を差し出して来たことに加え、この偽装ときた。どうやら三郎は誰かに『付き合っているなら手を繋ぐもの』などという微妙にズレた入れ知恵でもされたようだ。

可愛らしい勘違いもあったものだと思いつつ、勘右衛門はそのままにしていた。懸念は尤もであり、彼が彼氏役の継続を承服していることを踏まえれば妥当な提案だからである。何より三郎と堂々と触れ合える機会を得られるなど願ってもないことだ。むしろ真つ当な理由があるのに断る方がおかしいだろう。あの日手を繋いで移動してしまっているため今更取り繕う必要がないのも採用の判断を後押ししていた。故に勘右衛門は、完璧主義のためか驚くほど協力的な三郎に感謝しつつ、ささやかなスキンスリップの機会を大いに満喫しているというわけだった。

彼氏のふりの継続によるもう一つの、極めて些細な変化。それは先刻廊下から呼び掛けられたように、三郎が勘右衛門に物を借りに来るようになったことだ。

八左エ門は忘れ物をする度に勘右衛門や兵助に借りに来ていたが、三郎が来ることは今までなかった。これまでどうしていたのかは不明だが彼がそんな振る舞いをするようになったのは明らかに彼氏役を頼んで以降である。しかも毎度、勘右衛門を名指しで頼ってくるのだ。以上の事実を踏まえると、彼氏役を務める中で精神的距離が縮まり勘右衛門に遠慮をしなくなった可能性は大いにあるだろう。そう思うと、なんとなく面はゆい心地もするというものだ。

だがそれらの変化を嬉しいと感じるのは、勘右衛門が三郎に特別な好意を持つているからだ。特に物を借りに来られるというのは一般的には迷惑なことで、貸す側が喜ぶものではない。

「またあ？ いいけど今日中に返せよ、明日使うから。前みたいになら困るし」

故に勘右衛門はやや迷惑そうな態度を装い釘を刺しつつ、ジャージの入った袋を差し出した。苦言自体は事実であり勘右衛門の本音でもある。以前貸した際に洗って返せと言ったところ、家に持ち帰ったまま忘れ去られ三郎のジャージを借りる羽目になったことがあったのだ。

互いのジャージを交換して着るなど、どこぞのバカッポルのような感じを抱いた者が実際にいたかどうかは分からないが。結果的にそうなっただけで、その状況自体に気付いていない者の方が多いだろうとは思ふ。しかし勘右衛門には周囲の目が気がかりだった。それ以上に、実際に三郎のジャージを着ている自分と阿呆過ぎる感想を抱いた自身の残念な思考回路の両方に、勘右衛門は羞恥を覚え頭を抱えたのである。

そのような経緯から、勘右衛門は二の轍を踏まぬよう洗濯の義務を撤廃したのである。嫌味たらしい口ぶりで彼に引け目を感じさせないようにし、本日中に間違ひなく返して貰うことを狙っている。三郎に頼られる立場は維持しながらも己がいたたまれない状態に陥るのを回避する、完璧な戦略だと自負していた。

しかし。

「さすがに今日の明日で忘れないって」

三郎は笑顔でそう答えながら袋を受け取った。意識すると『洗った上で明日間違ひなく返す』ということである。つまり勘右衛門の完璧な戦略は失敗に終わったのだ。意に副わぬ旨を何食わぬ顔で答える彼の邪気のない笑顔が逆に不信感を煽る。

「……お前、大して汗かかんだろ。万が一汗臭くても気にしないし、いいから終わったらすぐ返して」

勘右衛門は半眼になり疑わしさを露骨に表現しつつ、直球で念押しした。だが三郎は今一度にっこりと笑うだけで口を利かない。返答を要求しようと口を開きかけたが図ったかのように予鈴が鳴ったため、勘右衛門は礼を言い足早に去って行く彼を見送るしかなかった。

その後、懸念どおりと言うべきか、三郎は次の休み時間、そのまた次の休み時間になってもジャージの返却に訪れなかった。故に勘右衛門は下校前に回収しようと奔走したのだがのらりくらりと躲かたされてまんまと逃げられてしまったのだ。鬼電しても応じない三郎に困惑し、勘右衛門は結局『絶対に忘れるな』とメールで釘を刺すことくらいしかできなかった。

しかし。

「悪い、乾燥機が故障して乾かなかったから今日は俺のを使ってくれ」

翌朝、三郎が差し出してきたのは彼自身のジャージだった。言い訳めいた説明をする彼の顔にはやはり不自然なほど邪気のない笑みが浮かべられていて、胡散臭いことこの上なかった。

——嫌がらせというか、弄ばれている気がする。

勘右衛門が半眼無言でジャージを受け取ってから三郎の頭を小突いたのは言うまでもない。

そんな風に遊ばれるのが不本意で割と本気で渋りはしても、三郎に乞われれば勘右衛門には断ることができなかつた。そのような馬鹿みたいなやり取りを楽しく感じていたのもまた事実だつたからだ。

ささやかな幸せに満ちた時間は色鮮やかで、すべてが輝いて見えるようだ。  
愛おしい日々は、あつという間に過ぎていく。

\*\*\*

「兵助に、おからクッキー作ってあげようと思つて」

実蓄が照れた様子で突然そんな話をしたのは二月に入つたばかりのことだつた。勘右衛門はそれが日本では恋人のイベントとして根付いた聖なる日を意識してのことだとすぐ察した。

一年前のこの日から付き合ひ始めたのだ、実蓄と兵助にとっては記念日とも言えるだろう。普段から五人で過ごすことを優先しがちな二人だが、はにかむ実蓄の様子からして恋人関係は良好のようである。それを友人として喜ばしく思う反面、三郎の心中を思うとなんとも切ない気分になる。

「いいねえ、喜ぶよきつと。俺も食べたいなく、多めに作って俺にも食わせてよ」

故に勘右衛門は率直にねだつた。自身がご相伴に与りたいのももちろん本心だが、主たる目的は三郎の分の確実な確保にある。おからを使う時点で兵助のための菓子だというのは一目瞭然だが、三郎の分の用意もあれば傷は浅くなるだろう。勘右衛門の分を用意してくれるなら、友チョコならぬ友クッキーは三郎の手元にも確実に渡るだろうと考えたのだ。

「なら手伝つてよ勘右衛門。初めて作るから、上手くいくか分かんないし」  
「了解了解、力仕事ならまっかせろ」

おねだりに応じる代わりに提示された条件に、勘右衛門は二つ返事で応じた。手伝うくらい朝飯前だ。むしろ勘右衛門が手伝うことにより『実蓄の手作り』が『共同制作』の方に傾くと思ふと、三郎が受けるだろうダメージを一層軽くできる期待も持てる。

「みんなには内緒ね。……上手くできるか、分かんないし」

勘右衛門の目論見など知る由もない実蓄は、眉を下げ自信なさげに笑う。そんな純真な友人を微笑ましく思いつつ即座に請け合おうとして、しかし勘右衛門はふと懸念事項があることに思い至り一旦口を閉ざした。

勘右衛門にとつての実蓄は大事な友人で、それ以上でもそれ以下でもない。下心のしの字も持ったことはなく将来持つこともないだろう。だが彼女は彼氏持ちの年頃の女子で、おまけに執着強めの三郎セムムもいる。友人とはいえ男である自分が、彼らの目を盗んで彼女の家を訪れてもいいものだろうか。二人の意に副わぬ行動を取り要らぬトラブルを招く事態は避けたい。

「でもさ、俺一人でこっそり実蓄んち行っているの？ 親御さんがいらつしやるとしてもさ」  
「両親は出かけてるはずだから大丈夫だよ」

冗談半分本心半分で問えば、実蓄は材料をメモに書き出す手を止めずに答える。

その的外れすぎる返答に、勘右衛門は前のめりにずっこけそうになった。どこの高校男子が真っ先に『友達の両親と顔を合わせるのが気まずい』なんて懸念を持つか、小学生か。むしろ真逆と言えるような、より重大な問題に思い至りもしないなど危機感がなさすぎやしないかと心配になる。故に勘右衛門は既に下がり気味だった眉をさらに下げ、露骨に苦笑を滲ませた。

「いやそれ、なおさらダメじゃない？ 彼氏でもない男がさ」

「勘右衛門なら平気でしょ。兵助も三郎も気にしないよ」

より踏み込んだ表現で率直に問題とする点を訴えると、今度は正しく論点を認識した上だと受け取れる答えが、迷う素振りもなく返された。優柔不断な性質の実蓄には珍しいその反応に兵助と三郎、なにより自分への厚い信頼を感じ至極くすぐったい気持ちになる。

「……大丈夫じゃなかったら、実蓄から二人に説明してくれよな」

勘右衛門は面はゆい気持ちに誤魔化すように唇を尖らせ、それでようやくやく首を縦に振った。

今年の二月十四日は月曜日だ。故に勘右衛門は前日である日曜に実蓄の家を訪ねた。彼女はやはり自信なさそうにしていたが、レシピと睨めっこしての調理となったためか常の大雑把さは鳴りを潜め、故にクッキーは無事美味しくできあがった。勘右衛門の主な役割は彼女の話し相手で、実作業としては材料を混ぜ合わせる手伝いと型抜き、洗い物をしたくらいだった。

そして迎えた、バレンタイン当日。いつもの面々は放課後三郎の家に集結していた。紅一点である実蕾がいることと家人の有無やアクセスのよさを考慮した結果、五人で集まるのは大抵彼の家だった。

「ハッピーバレンタイン、つてことでおからクッキーだよ。いっぱい食べてね」

「ええっ、実蕾の手作り!? 嘘だろ……すぐく美味そうにできてるのに」

持参したクッキーをテーブルの上に広げた実蕾に、三郎が驚愕した上でしげしげと成果物を眺めた。どうやら彼女の不安は過去実績に基づくものであったらしい。

「三郎うるさい。昨日勘右衛門と一緒に作ったの。美味しくできてるよ、もちろん!」

実蕾は半眼で三郎を睨めつける傍ら、小さな袋を兵助に手渡した。中には勘右衛門の発案による、チョコペンでの装飾が施された特別仕様のクッキーが入っている。

「ぎゃー! 彼女の手作りとかロマン過ぎる!! 羨ましい! 頂きますッ!!」

「ハチは批判するか喜んで食べるかどっちかにしなよ」

大声を出しながら早速クッキーを口に放り込んだ八左エ門に、兵助が受け取った小袋を鞆にしまいながらツッコミを入れる。

勘右衛門は一ミリほどの不安から兵助と三郎の顔色を窺っていたが、二人が「一緒に作った」という情報に引っかけかりを覚える素振りはない。どこで調理したのかにまで頭が回っていない可能性は拭い切れないが取り敢えず胸を撫で下ろした。

クッキーに舌鼓を打つ傍ら、いつものように雑談に花が咲く。

「あーあ、春から受験生かあ……やだなあ」

八左エ門がクッキーをかじりつつ眉を下げた。

五人は現在二年生で、進級すれば高校三年生——またの名を受験生という——になる。進級まであと一月ほどあるが、学校では当然受験に向けた準備が既に始まっていた。

「そういうやハチ、まだ進路希望調査提出してないんだって？早く出せよ」

八左エ門のぼやきで思い出したのか、三郎が唐突に苦言を呈した。指摘を受けた八左エ門が驚いたように顔を上げる。

「えっ？てことは三郎は提出済みなわけ!? まじかよ！もう志望校決まってるの？」

「当たり前だ、提出期限先週だったんだぞ。俺の第一志望はY大だ」

「……その心は？」

志望校まで淀みなく答えた三郎に、八左エ門が真剣味を帯びた表情で間髪入れずに尋ねた。ごくり、と唾を飲み下す様はどう好意的にとっても完全にふざけている。しかし三郎はそれに悪乗りする様子もなく、真顔のまま再び口を開いた。

「家から近いし、今A判定だからちよーどいいと思って。行きたい学部もあるしな」

「嫌味つたらしい理由だな！」

あっさりかつ真面目に返され八左エ門は三郎に嘯みついた。彼が憤慨するのも無理もない。

Y大はこの近辺ではかなり偏差値が高い、いわゆる難関大学の一つだ。そんな大学に『近い』『ちょうどいい』などという理由で進学できる者はそうはいないはずである。八左エ門の率直過ぎる感想に、しかし三郎を除く一同は同意を込めて苦笑した。

「兵助もY大志望だぞ」

「まじで!？」

勘右衛門が他人の情報で二人の会話に横やりを入れると、三郎を睨めつけていた八左エ門が再び驚きの声を上げた。こちらを一瞥してから問題の人物へと視線を移す。

「——ああ、実はそうなんだ。まだB判定だけど、頑張れば入れるかなって」

少し恥ずかしそうに名乗りを上げた兵助に、勘右衛門は思わず呆れた。彼が恥じらっているのは三郎がA判定と聞いたからだろう。だが彼がB判定だと言うのは、この前の模試の結果がそうだったからに過ぎない。勘右衛門は知っているのだ——彼が過去実績の八割以上でA判定、更にいえばS判定を取ったこともあることを。恥じる要素など少しも無いと思うのだが、彼は旧くから知っていてもなお感心させられるほどに慎重かつ謙虚な青年である。

「私はC大」

続けて実蕃が志望校を述べた。C大は偏差値的には中の上といったところで、文学部が有名で品格を重んじる気風の大学だ。キャンパスがY大から近い点も含め実蕃にぴったりである。

「嘘だろ、皆決まってんのかよ……勘右衛門は？」

「俺？ まだ決めてないよ」

げんなりした様子の友人から一縷の期待を込めた視線を向けられ、勘右衛門は口の中ものを嚙下してからけろりと答えた。途端、八左エ門がぱあつと顔を明るくして抱きついてくる。

「うお、よかった！ 仲間がいた〜!!」

「まあ、勉強したいことは決まってるし大体絞ってあるけどね。もう調査票も提出したし」

想定どおりの反応に内心で爆笑しつつ運動部らしい筋肉質な身体を受け止めた勘右衛門は、満を持して彼の安堵を台無しにするセリフをさらりと口にした。無論、情報を開示する順番や態度は意図してのものである。

「なんだって!? 仲間だと思っただのに、この裏切り者ッ!!」

「なにすんだよ、別に嘘はついてないだろ〜」

まんまと上げて落とされた八左エ門が抗議してくる。勘右衛門は友人の絶妙な頭突き攻撃を肩や腕に受けながら己が無実を呑気な口調で訴えるでもなく訴えた。八左エ門の反応が愉快でつつい弄ってしまうのは勘右衛門の悪い癖だ。視界に映る兵助と実蕃は苦笑しながらこちらを眺めている。いつもと変わらない、平和で穏やかな空間がそこにあった。

「提出期限に提出しないお前が悪いんだろ、アホハチ」

唐突に、背後から八左エ門への批判的なコメントが飛んだ。同時に腕を引かれ、勘右衛門は尻餅をつく形で己を責める友の手から逃れる。次いで首元に腕が回され締め上げるように引きずられた。やがて背中が何かにぐいと押しつけられたところで、ようやく襲撃が治まる。

思いがけない展開に驚いた勘右衛門が首に回った腕を押さえつつ背後を仰ぎ見れば、自分を拘束している人物が八左エ門に対して人の悪い笑みを向けているのが目に映った。

「うえっ、ド正論じゃん！ なんか三郎、今日辛辣じゃね!？」

八左エ門は潰された蛙の如き呻き声を上げた。勘右衛門は三郎の腕に捕らえられたまま苦笑で応じる。だがその笑みは引きつってしまっていた。頭上には多数の疑問符が発生しつつある。勘右衛門が八左エ門をしばしば弄る故に、このようなやり取りは以前からよく発生していた。じゃれあいという程度で、端から見ても空気も穏やかで冗談であるのは明白だ。だということに何故今回、三郎が割って入ってきたのか理解できなかった。しかし三郎に抱き寄せられているかのような己の現状に、じわりと頬が熱くなる。

三郎に構われるのは嬉しく、本当は彼が放してくれるまでそのまま居たいくらいだ。だが客観的に見て、同じ歳の男の腕に大人しく拘束されたまま頬を赤らめているのは不自然極まらないだろう。故に勘右衛門は自然な態度を心がけつつ、やや急いで彼の腕から逃れた。

「まあまあ。そんな焦らんでもハチならちゃんと考えればすぐ決まるって。進路調査票なんか現時点での志望なんだし後から変えられるんだから、適当に書いて出しとけばいいんだよ」

「うう、勘右衛門……！ いい奴うゝ、裏切り者とか言つてごめんな友よ……!」

弄んだ友人を励ますことで意識的に平常心を保つ。勘右衛門の取って付けたような助言に、しかし八左エ門は感激したように両手を組んでこちらを見つめている。三郎の妙な言動を気に

した様子もない。華麗過ぎる手のひら返しつぷりに、兵助たちが呆れたように声を立てて笑う。同様に笑いながらちらと窺えば、三郎も可笑しそうに笑っていた。特に変わった様子はなく、心底楽しそうなその笑顔に、勘右衛門は一層嬉しくなつて笑う。

此度の言動はまったくの謎だったが、最近の三郎はなにかと己に構ってくる。それがどんな言動であっても、勘右衛門は構われる度に幸せな気持ちになるのだ。

勘右衛門は、ささやかな幸福の満ちた愛おしい時間に酔っていた。降り積もる幸せに埋もれ忘れてしまっていたのだ——今ある関係が、偽りの上に構築されているのだということ。

虚構の幸福がいつまでも続くはずなど、なかったのに。